

埼玉県川口市立北中学校

『学びの リ・イノベーション』

北の空の下は さわやかな風と本気でがんばる友がいる



川口市立北中学校では生徒たちが新しい社会に対応するために、

「創造性 (creativity)」 A I がどんなに発達しても実現できない人間固有の能力を活かし

「探求 (inquiry)」 一人では達成できない多様な視点による思考を深め

「協同 (collaboration)」 仲間や先生と繋がり学びを習得し育ちあう学校教育をめざしています。

目 次

P 3	令和 7 年度川口市立北中学校研究構想（学校改革）
P 2	校内研修計画案
P 4	川口市立北中学校 学校改革スタンダード I ヴィジョン
P 5	II 川口北中「協同的な学び」のルール
P 6	III 授業観察の深め方
P 7	IV 授業観察 ・ 記録の取り方
P 8	リフレクションシート
P 9	V 「学びの共同体の構想と実践」に取り組むために <u>全ての先生が実践してほしい</u>
	<u>3つの出発点</u>
P10	VI 「学びの共同体」を始めるにあたっての教師の心得
P14	VII Q & A 学びの共同体とは

令和7年度川口市立北中学校研究構想（学校改革）

【学校教育目標】 〈賢く 逞しく 温かく〉

- ・賢く……自ら学び、自ら考えて行動する生徒の育成（自主）
- ・逞しく……心身ともに健康な生徒の育成（健康）
- ・温かく……心豊かで、思いやりのある生徒の育成（規範）

【目指す学校像】 〈夢や目標を実現する力を育てる北中学校〉

【本年度の努力点】

- （1）自ら考え、創造力あふれる生徒を育成する 【より 賢く】
「わかる・できる・生徒が主体的に課題解決に取り組める教育活動の実践。」
- （2）心身共に健康で課題解決に努める生徒を育成する 【より 逞しく】
「安全指導・管理及び心身共に逞しい体の育成と実践」
- （3）礼儀をわきまえ、思いやりのある生徒を育成する 【より 温かく】
「時を守り、場を清め、礼を正す指導実践。」
- （4）教育環境の整備に努め、その指導を徹底する
- （5）職場の安全衛生管理に努め、明るい職場づくりに努める
- （6）家庭・地域及び関係機関（小学校・高校）との連携を深める

【本年度の重要課題】

「学力向上」 「不登校対策」 「命の指導」 「積極的生徒指導」

【令和7年度校内研修 研究主題及びテーマ】 ※個人の研究テーマは研究主題を基に各自で設定

研究主題『学びの共同体の構想と実践』

学校研究テーマ「探究と協同の学びの創造」（個別最適な学びと協働的な学びの一体化による授業改善）

【校内研究構想】

学校の公共的使命である「一人残らず子どもの学ぶ権利を実現し、その学びの質を高めること」と「民主主義の社会を準備すること」を実現するために「学びの共同体」のヴィジョンによって実践する。

校内研究ヴィジョン

生徒一人ひとりを学びの主人公に育て、探究的で協働的な質の高い学びを追求する授業改革を推進することにより他者と共に生きる生き方を学べる種をまき、生涯にむけて自らの考えをもって学びに向かう根を張らせる。

方 策

①「学びの共同体」の研修の充実発展

- ・関東圏内の学びの共同体のパイロットスクールへの視察（できれば全教職員）
- ・指導者を招聘して「学びの共同体」の理解を深める研修の実施

②「学びの共同体」の授業研究の充実発展

- ・提案授業の実施『研究授業によって学校を変える』という観念からの脱却（改革は日々の授業の中に）
- ・校内の誰もが提案授業者になり、「研究会のための授業」ではなく、「日常の授業」を公開する。
- ・授業の評価や助言は慎み、教室の事実から学んだことを交流し、同僚性を高める授業協議会の実施。

③地区小・中学校との連携した研修の実施

- ・9年間を見通した「学びの共同体」の実施への指導体制の構築

校内研修計画案

1. 「学びの共同体」中長期的計画

【令和4年度】『学びの共同体の土台作り』

- ①学びの共同体を理解する
- ②学びの共同体の先進校から学ぶ ※県内近郊のパイロットスクールへの視察
- ③学びの共同体を実践する
- ④4年度は教科単位での校内研究会を実施する。※美術・技術/家庭・音楽は3教科合同で。
- ⑤学びの共同体の神根学区内小中学校・本校保護者・地域への発信

【令和5年度】『学びの共同体を充実させる』

- ①パイロットスクールとして指導者を招聘して公開研究会を実施する（年に2回）
- ②北中（神根）学区内の小中合同授業研究会の実施
- ③教科横断的な校内研究会の実施 ※公開研究会とリンクする
- ④科単位での校内研究会の充実

【令和6年度～】『学びの共同体を発展させる』

研究主題『学びの共同体の構想と実践』

学校研究テーマ「探究と協同の学びの創造」（個別最適な学びと協同的な学びの一体化による授業改善）

※個人の研究テーマは研究主題を基に各自で設定

- ①パイロットスクールとして指導者を招聘して公開研究会を実施する（年に2回）
- ②北中（神根）学区内の小中合同授業研究会の実施
- ③保護者・地域が参加する学びの共同体の実践
（読み聞かせ・SDGS・道徳・防災教育・防犯教育・ライフスキル等）
- ④教科横断的な校内研究会の実施 ※公開研究会とリンクする
- ⑤教科単位での校内研究会の充実

2. 令和7年度「学びの共同体」実践計画

期 月	実 践 内 容	備 考
4 月	○「学びの共同体」スタートアップ研修 ・研究構想図提示	職員会議・校内研修会 校務支援システム
5 月	☆「学びの共同体」異動教員対象研修（4／4） 9：00－10：00 ・「学びの共同体」の共通理解を深める ●学びの共同体の実践（全教職員） ○県内近郊のパイロットスクールへの視察1	教科グループごとに実施計画作成 「学び」のルール of 徹底 ・学びのデザインシート ・リフレクションシート ・授業観察の深め方 1学期内に視察
6 月	☆第1回公開授業研究会（6／12）	佐藤学先生招聘

		神根学区内小中学校 市教委
8 月	○神根地区小中連携した小中合同研修 ※8 月下旬で調整中 ・テーマは「小中連携しての学びのイノベーション」	小中連携、主幹担当 神根学区内小中学校
9 月 10 月 11 月 12 月	○県内近郊のパイロットスクールへの視察 2 ○教科横断的な授業観察を実施 ・授業公開（全職員 1 回以上） ○校内研修 ・パイロットスクール視察報告を中心に研修を深め学びの質の向上と職員の同僚性を高める ☆第 2 回公開授業研究会（12／8） ○「学びの共同体」実践の振り返りとまとめ ①公開授業（全体） ②焦点授業 ③研究協議	視察 1 参加以外の全教職員 研修担当 視察 2 参加教諭から情報伝達 佐藤学先生招聘 神根学区内小中学校 市教委
1 月 2 月 3 月	○授業改善（学びのイノベーション）の評価 （本年度の振り返りと次年度へ向けての課題共有）	全教職員
4 月	○研究構想図提示	

【川口市立北中学校 学校改革スタンダード】

～川口市立北中学校は、「学びの共同体の構想と実践」を柱とした学校改革を推進します。～

『学びの共同体』とは、

「子どもたちが学び育ち合う場所としての学校」

「教師が専門家として学び、成長し合う場所としての学校」

「親や地域の住民が教育活動に参加して互いに学び合う場所としての学校」をヴィジョンに掲げる学校改革です。

I ヴィジョン

「学びの共同体」とは次のような〈ヴィジョン〉〈哲学〉〈活動システム〉によって授業改革と学校改革を推進します。

〈ヴィジョン〉 目指す学校像・構想

学校は、子どもたちが学び育ち合う場所であるだけでなく、教師も専門家として学び育ち合う場所であり、保護者や市民も改革に協力し参画して学び育ち合う場所です。
このヴィジョンを掲げて、私たちは、一人残らず子どもの学ぶ権利を実現し、一人残らず教師が教育専門家として成長し、大多数の保護者や市民が学校に信頼関係を築く学校改革を推進します。この改革を通して、私たちは一人残らず学びの主権者となる民主主義の社会を求めています。

〈哲学〉 物事の根底にある根本原理（最も大事な法則）を追求する考え

この学校改革は、「公共性の哲学」（教室を開く）「民主主義の哲学」（他者と共に生きる生き方）「卓越性の哲学」（どんな条件にあっても、その条件に応じてベストを尽くす）の三つの哲学を基礎にしています。これらの哲学を実現する基礎を「聴き合う関係」による対話的コミュニケーションに求めています。

〈活動システム〉

この学校改革は、教室における「協同的学び」の実現、校内において教師が授業を開き合い学び合う「同僚性」の構築、保護者や市民が改革に参加する「学習参加」の実践を推進しています

Ⅱ 川口北中「協同的な学び」のルール

1. 学びの環境整備

- ・教室をきれいにする。ごみは落ちていないか。
- ・机や椅子を整頓する。教室環境の整備はされているか。
- ・授業の始まりは落ち着いた雰囲気始める。
- ・伏せている、寝ている、困り顔をしている生徒を放置しない。授業の最初に声をかける。
- ・21世紀型授業体型（4人組男女交互机配置）

2. 「協同的な学び」の指導について

- ・生徒と生徒をつなぐ。教師からすぐに教えない。仲間に訊ねるように促す。
- ・授業のねらいや課題をはっきりと示す。
- ・少人数体型（4人組）は、単元の特性に合わせて教室の一体感があるものにする。
- ・学習支援の言葉かけ。「まずは一人で考えよう」「わからないところは友達に訊いてみよう」「グループで話し合って」「もう一度教科書をよく読んでみよう」「私語はしない、小さな声で話そう」など。
- ・学び合いの共有。分からない時に、「教えて」と仲間に訊ねる。「教えて」と言われたら、相手が分かるまで教える。
- ・聞き合いを共有。教師の声、仲間の声を聴く。うなずく、受け止める。
- ・活動が騒がしくなったときは、生徒の思考が止まっているサインである。学びが生まれていない時は、協同的な学習を終了させる。

3. クラス全体で「学び合う」学びの場面について

○授業者はファシリテーター（学びの進行役）に徹する（50分間全速力で学びに向かわせる伴走者）

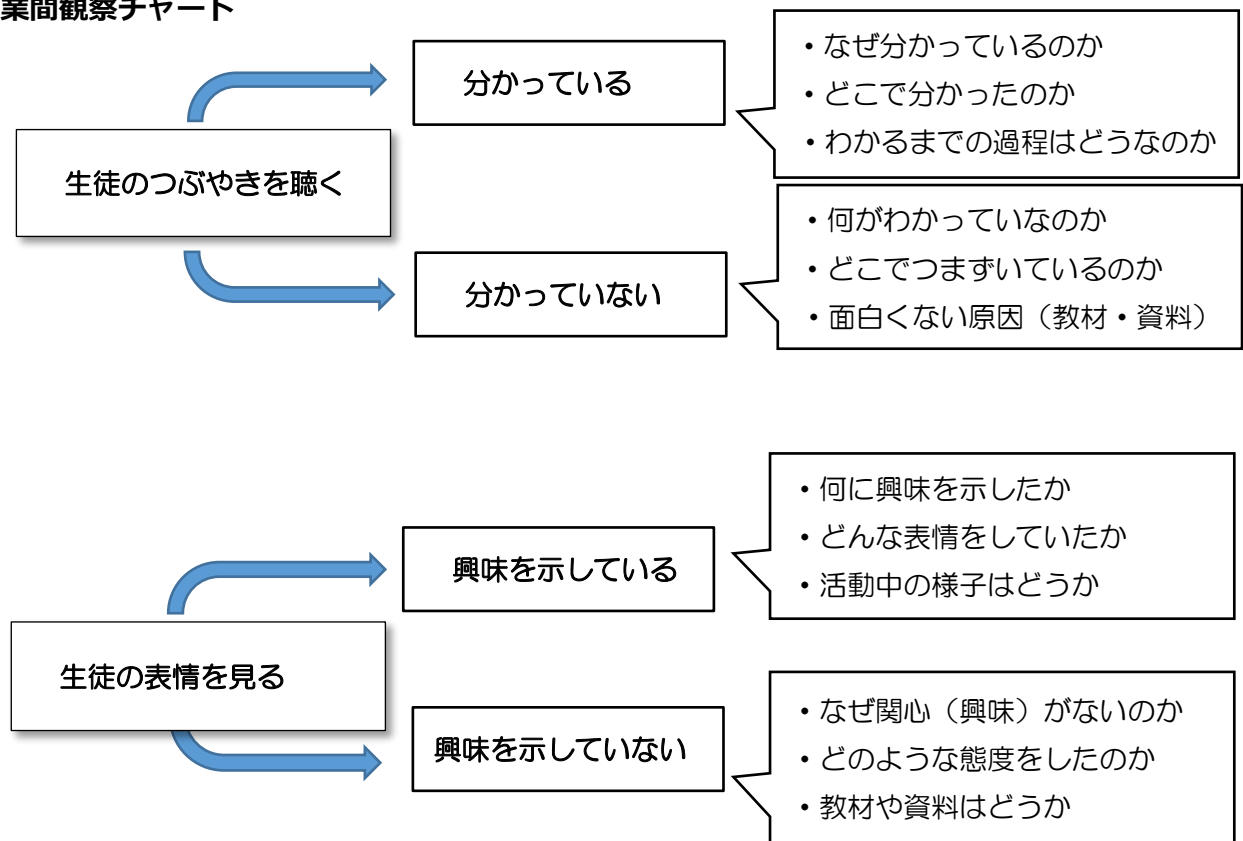
- ・授業者が答えを言ったり、ポイントをまとめたりすることはあえてしない。個の学びを成立させることが重要である。「いつ、そう思った？」「どこからそう考えたの？」など意見の根拠にせまる。
- ・授業者の仕事は生徒に「分かること」と「分からないこと」を整理させることである。分からない生徒や困り感を見せている生徒には「どこが分からない？」と訊いてあげる。
- ・「共有の課題」「ジャンプの課題」の設定。共有→ジャンプという手順を踏むのが良いわけではない。いきなりジャンプの課題から入ることもありえる。

4. 教師の同僚性を大切にする

- ・授業をいつでも誰でも見ることができる。
- ・授業のアイデアやデザインを共有できる。
- ・生徒の力を信じ、あきらめない。（全ての生徒の学びを支援する）
- ・絶えず挑戦できる教師集団である。（チャンス・チャレンジ・チェンジ）

Ⅲ 授業観察の深め方

1. 授業間観察チャート



2. 授業観察について

- ・ 教師中心の見方ではなく生徒中心の見方へ変換する。（生徒が何を学んだかを観察する）
- ・ 全体の様子を見るのではなく、一人の生徒に注目して学びの様子を見る。
- ・ どの場面で生徒が学んでいたのか、いなかったのか。その時教師はどのようにしていたのかを見る。（学んでいない場面での原因は何かに注目する）
- ・ 自己との対話、他者との対話、テキストとの対話はどうであったかを見取る。
- ・ 生徒の学びが途切れない様に、授業中は生徒に話しかけない。静かに見守る。

3. 研究討議について

- ・ 授業者が授業のねらいや思いを語る。
- ・ 討議では、生徒が何を学んだか、授業の目標は達成されたか、ポイントとなる所を中心に話す。
- ・ 授業者のねらいと生徒の学びがずれていたと解釈した場合は、改善の方向性を検討し提案する。

4. 教職員の同僚性を高めるために

- ・ 議論が目的ではなく、参加者の多様な見取りを通して参観者それぞれが自分の視野を広げる。
- ・ 自分の授業力向上のためだけでなく、教師と生徒のために考える。

Ⅳ 授業観察 ・ 記録の取り方

○リフレクションシートを活用する

- ・ 授業内の行動を記録する。
- ・ 生徒の学びがとぎれないように、授業中は生徒に話しかけず、観察に集中する。
- ・ 生徒にとって授業者の存在、仲間の存在に集中できるように静かに見守る。
- ・ 他の観察中の先生方の司会を遮らないように工夫する。
- ・ 教師が「どう教えたか」ではなく、「生徒の学びはどうだったか」「子どもたちの関係性はどうか」
という観点で記録する。
- ・ どの場面で生徒たちが学んでいたか、いなかったかを書く。
- ・ 学んでいた場面では、教師がどのような「学びへ向かわせる仕掛け」をしていたかを考える。
- ・ 学んでいなかった場面では、何が原因で学んでいないのかを探る。
- ・ 本時の目標（「授業者が本時の授業で生徒につけたい力・学ばせたいこと」）が教科の本質を追求する課題になっているかに視点をあてて記録する。
- ・ 些細なことと切り捨てず、「教師の発問・指示・支援」、「生徒の行動・発言・つぶやき・書いたこと・しぐさ」なども記録しておく。

川口市立北中学校「学びの共同体」への挑戦 リフレクションシート

教科等		日付	／ ()
授業者		参観者	

※○欄には、よかったら「○」。見とれない場合は空欄で構いません。

※メモ欄には、子供の様子・つぶやき、教師の発言など、
「良かったこと、学んだこと、気付いたこと」を箇条書きで、具体的に記入。
「子供の名前」「時間帯」などもあるといいかも。

学びのデザインについて	○欄	メモ欄
①学びのデザイン」が適切であった。		
②「共有の学び」の課題設定は適切であった。		
③「ジャンプの学び」の課題設定が適切であった。		
④教師の関与（「つなぎ」「もどし」等）は適切であった。		
⑤実態に応じて「学びのデザイン」を柔軟に変更できた。		
協同的・探究的な学びについて	○欄	
⑥子供たちの「つぶやき」や「気付き」が受容されていた。		
⑦子供たちが「わからないこと」を探究し合う場面があった。		
⑧子供たち同士の言葉に「つながり」があった。		
⑨子供たちが「ジャンプの学び」の時間を有効に活用していた。		
⑩子供たちの「聴き合う関係」ができていた。		
⑪子供たち一人一人が「学びの主人公」になっていた。		
⑫子供たち、誰一人も取り残されていなかった。		
⑬子供たちにとって「真正の学び」となっていた。		

V 『学びの共同体の構想と実践』に取り組むために

全ての先生が実践してほしい3つの出発点

1、第一の出発点は、「学びの場と関係をつくる」ことです。

黒板に向かって前向きに1列に並べる20世紀型の教室配置をやめ、聴き合う関係、ケアの関係を築く、新たな21世紀型の教室配置にする。具体的には、

- 子どもの学習法は4人組の小人数グループ体型で実施するなどして「聴き合う場」をつくること。
- 誰もが安心して聴き合う関係をつくるために最も重要な「静かな環境」をつくること。

2、第二の出発点は、「学びをデザイン」することです。

【基本的な学習方法】

- 授業の前半は「共有の課題」として教科書レベルの内容について扱う。
- 授業の後半は「ジャンプの課題」と言って、通常の授業よりもはるかに高いレベルで、3分の1くらいの子どもにしかわからないような難しい内容を設定する。 ※ヴィゴツキーの発達の最近接領域
キーポイントは、教科書レベルの「共有の課題」と、教科書を超越する通常の授業よりもはるかに高いレベルで、3分の1くらいの子どもにしかわからないような難しい内容レベルの「ジャンプの課題」の組み合わせです。この組み合わせによる基本的な学習方法を示し、本校の生徒の実態に応じた学びの場と、北中スタイル確立を目指す。それによって、どの子どもも授業の最初から最後まで受け身ではなく、自ら学びの主人公となり、共同で探究し合う授業を構築し、「真正の学び」に繋げる。

3、第三の出発点は、すべての教師が教室を開き、専門家して学び合う同僚性（collegiality）を構築することです。

- 全教師が年間に最低1回は授業を公開し協議会を行う。
- 生徒のどこに学びがあったか、学びの事実から学んだことを交流することに主軸を置く。研究協議の内容・進め方（北中スタンダード）に沿って、授業を評価したり、アドバイスしたり、教え方を議論するのではなく、生徒のどこに学びがあったか、学びの事実から学んだことを、交流することに主軸を置いてファシリテータとしての資質を高めることに集中する研究協議にする。
- 研究主題「学びの共同体の構想と実践」～探究と協同の学びの創造～のもと、一人ひとりが研究の個人テーマをもって学びの共同体に挑戦するとともに教師間の同僚性を高め指導力向上に努める。

『一人の百歩ではなく、百人の一步』です。

生徒の未来のために力を合わせて頑張りましょう。

Ⅵ 「学びの共同体」を始めるにあたっての教師の心得

1 「子どもたちが学び合う場所としての学校」なぜ、「学びの共同体」か？

- ①目指す学校像や学校教育目標、スローガンを具現化することができる。
- ②「学び続ける生徒は崩れない」という理念を基に、学力向上・積極的な生徒指導・不登校生徒の改善・命の指導につながる。
- ③「生徒の考えから出発する学び」に切り替え、「習得・活用・探究型学習」や「言語活動」を充実できる。
- ④各教科で共通実践できるので、教科の枠を超え、「同僚性」を構築できる。

2 一斉授業から「学びの共同体」にしたなら、おしゃべりが多くなり、授業に集中できないのでは？

もっと、生徒の力や「学びの共同体」を信じ、だまされたと思って、まず実践を！！

- 学校改革は運動ではなく支援のネットワーク。
- 学校は内側からしか変わらないし、内側からの改革は、外からの支援なしには持続しない。
- 学校改革がうまくいかないのは、子どもの力を借りていないからだ。

☺「コの字」の机配置にすると

- ①学級全体を見渡すことができ、意見が言いやすい。相手の意見を聞きやすい。
- ②いろいろな人が、どんな表情で発表しているかが分かって面白い。友達に分からないところがあると、すぐ聞けるようになった。

☺小グループ（男女混合 4 人組）活動を位置づけると

- ①周りの人に分からないところを徹底的に教えてもらうことができる。
- ②一斉だと恥ずかしくて発表できないけど、小グループだとなぜか発表できてよい。男女性別を超えた学びあいも深まる。

3. どこから取り組んだら良いのか？

まずは、聴き合う学級づくりに取り組む。

- ①生徒たちが聴き合うことができるように、教師が生徒の話を「眼」「体」「心」で受け止めて聴く。
- ②男女交互の「コの字」型（道徳や特活）・小グループ型（1 グループ 4 人程度）の机配置にし、生徒どうしの言葉のやりとりを促す。
- ③生徒の目線に合わせるために、しゃがんで聴く、いすに座って聴く。
- ④困っている生徒が、教師や友達に依存できるような関係をつくる。
「ここどうすればいいの？」「教えて！！」「友達に聞いてごらん」

4. 21 世紀型の学びとは？

「探究」と「協同」がキーワード。生徒の考えから出発する学び。

教師の指導を「発信」から「受信」に切り替える（学びの専門家）

生徒から出された分からなさや疑問、発見を受け止め、授業や活動の中に位置づけて、他の生徒の考えとかかわらせる。教師はゴールだけを目指さない(正解だけを求めない)。

5. 生徒への対応を変えるとは？

- ①教師の声のトーンを落とし、テンションを下げる。
- ②教師が一方向的にしゃべらない。教師の発言：20%位がちょうど良い。
- ③ゆったりしたテンポで、間を大事に！生徒の発言にすぐに反応しない。一問一答式の発問はダメ！
- ④生徒との関わりを柔らかくにして、じっくりと対話する。
- ⑤生徒を怒って統制しない。大勢の前で一人を叱らない。(生徒の尊厳)

【授業改善の三要素（活動・協同・表現の共有）】

1 活動(一斉, 個人作業)

- ①観察する, 読み返す, 考えをまとめる, 確かめる, 操作的な活動をする, 半具体物による思考等の知的な活動をする。
- ②モノを用いた推論や問題解決的な活動をする。
- ③対象とじっくりかかわり, 自分で何らかの考えを持つ活動をする。

2 協同(小グループ活動)

- ①多様な考え方をすり合わせることによって, 互いの差異を認める。(考えを一つにまとめる必要はない)
- ②教師は援助が必要な生徒に必要な援助ができる。
- ③生徒どうしのかかわりで, 分かった生徒が分からない生徒をケアし, 集団のレベルアップに繋げる。
- ④学びの結果をさらに深めたり, 未知の課題に協同して挑戦できる。(背伸びとジャンプのある課題)

3 表現の共有(一斉)

- ①他者の話を聴き, 自分なりの考えを創る。
- ②発表する生徒の考えと自分の考えの差異を確かめる。
- ③他者とかかわる中で, 自分の考えを吟味し, 反省したり, 考えを補強したり, 広げたりする。

【教師の仕事は三つ「聴く・つなぐ・もどす」】

1 聴く

- ①その生徒の発言が教材やテキストのどことつながっているか。
- ②他のどの生徒の発言とどうつながっているか。
- ③その生徒自身の前の発言とどうつながっているか。

学びを切ってしまう言葉(聴いていない)

「後で…」「他に…」など子どもの発言を取り上げない。

2 つなぐ

- ①生徒の考えをつなぐ。
- ②生徒の考えとテキストをつなぐ。

- ③板書と生徒をつなぐ。
- ④今日学んだことと前に学んだことをつなぐ。
- ⑤教室で学んだことと社会で学んだことをつなぐ。

子どもを「つなぐ」言葉かけ

- ①「〇〇さんの意見を聴いて、どう思う？」
- ②「〇〇さんの意見を誰か分かりやすく話してくれる」
- ③「〇〇さんと△△さんの考えのどこが違う(同じ)？」
- ④「～っていったけれど、どうして？」
- ⑤「もう少し詳しく話してくれる？」
- ⑥「どうして〇〇なの？」
- ⑦「〇〇さんの意見と似ている人はいない？」
- ⑧「どうしてそう思ったの？」

3 もどす

- ①走りすぎたときにテキストにもどす。
- ②難しくなったときに課題にもどす。
- ③行き詰まったらグループにもどす。
- ④グループで話し合ったことを全体にもどす。

「もどす」言葉かけ

- ①「その考え、どこからそう思ったのか、教えてくれる？」
- ②「～って言っていたけど、どういうことかな？」
- ③「〇〇さんの言っていた～って、どういうことかな？」
- ④「どの言葉からそう思ったの？」(文章に戻る)
- ⑤「どうして、そう思ったの？」(テキストに戻る)
- ⑥「前はどんなふうに行ったのかな？」(既習事項に戻る)

【授業における教師の居方】

① 人の話を聴くことにこだわる

人の話を聴くことにこだわる。他者の考えや感じ方など、まずきちんと聴く子どもをはぐくみたい。それには、教師が子どものつぶやきを丁寧に拾い、学びの土俵にのせたり、子どもの声にならない声を聴くことが、ごく自然にできるようになりたい。

② 子どもの発言に理を与える

子どもの発言に理を与える。子どもは、いい意見だけが取り上げられる経験によって「いい意見を言わなければ」発表できないと思っているために、学年が上がるにつれて発表が少なくなる。間合いにも

子どもなりに理屈がある。子どものつまずきを発見し、修正するのがプロの仕事である。

③ ヘルプシーキング(help seeking : 援助行動)

援助が必要な子どもに必要な援助をすることがヘルプシーキングである。机間支援で大事なことは、援助しなければならない子どもの傍らでケアすることである。('いい先生は、ズボンにしわができる')。グループ活動の机間支援では、話し合いから外れている子どものケアとリーダーの指導に注意したい。

④ 他人に依存できる。

他人に依存できる。依存することは、人まねをしたり、分からないことを聞いたりする行為でもある。従って、子どもに人に教えてもらう行為を禁止してはいけない。困ったら他の人の力を借りることを知っているからこそ安心して生きていける。自立できる。「他人に依存できない子どもは自立もできない」

⑤ 静かに「待つ」

子どもが発言するのを静かに待つ教師になりたい。まず、子どもが考える時間を持てたかどうかを大事にして授業を行いたい。

【授業の振り返り(授業研究会)を大事にする】

- ①気軽に授業を公開し、「一人ひとりの生徒の学びは成立していたか」という視点から、生徒の学びの事実に基づいて、事後の研究協議を重ねていく。
- ②授業を評価しない。教室の事実から学ぶ。('よい授業」「見せる授業」を求めているのではない。)
- ③「どこで『学び』があったのか」「どこで躓いていたか」「学んだことは何か」を視点に、意見を交流する。参観者は子どもの固有名で、具体的な姿を全員が述べる。

VII Q & A 学びの共同体とは

Q 1 1 学びの共同体とは

学びの共同体は21世紀型の学校のヴィジョンであり、哲学であり、活動システムです。学びの共同体の学校改革は、学校を子どもたちが学び合う場所にするだけでなく、教師たちも専門家として学び育ち合う場所とし、親や市民も改革に参加し協力して学び合う学校づくりを推進しています。

Q 2 「学びの共同体」がめざすものとは

【子どもも教師も学び合い育ち合う学校】をめざし、「協同的な学び」「真正の学び」「教師の同僚性」などをキーテーマとして掲げ、丁寧な授業研究を推進しています。

Q 3 学びの共同体の効果とは

- (1) 社会面でのメリット・他者を知り、互いに支え合うかかわりを作る事ができる。・仲間意識が高まる。・多様な価値観や感じ方に触れることによって自己認識が豊かになる。
- (2) 学習面でのメリット・小グループ活動であるため、(自信がない場合も) 気軽に自分の意見が言え、学びに参加できる。

Q 4 学び合いと学びの共同体の違いとは

違いは多々ありますが、「学びの共同体」は、生徒を4人1組にし、課題を記したプリントを配り、生徒一人ひとりに取り組ませます。教え合うよう指示せず、分からない生徒が同じグループの生徒に尋ねる自発性を大切にします。一方、『学び合い』はグループになってもなくても時間内に課題を全員が助け合い達成するのを目指します。

Q 5 学びの共同体の特徴とは

特徴は、21世紀型の学びにふさわしい学校づくりにある

「学びの共同体」の改革は35年前に始めました。現在では全世界で17か国が挑戦しています。学びの共同体の特徴は、21世紀型の対話的・探究的学びを初めから提示し、それにふさわしい学校づくりをしてきたことです。その中でもベースとなるのが「聴き合う関係」です。

学びは対話によって成立するもので、一人では学びは成立しません。聴き合う関係をつくり、対話的なコミュニティを大切にする事で、高いレベルの学びを実現することができます。結果として、低学力の子どもがいる学校でも必ず成績が伸びるのです。この「聴き合う関係」をつくるためには「場」と「環境」が必要です。例えば、机の配置をみんなの顔が見えるコの字型にしたり、3、4人のグループの配置にしたりするなどして「聴き合う場」をつくります。また、誰もが安心して聴き合う関係をつくるために最も重要な「静かな環境」をつくります。廊下まで先生の声が響いているような教室では「聴き合う関係」はつくれません。

Q6 真正の学びと「対話的で深い学びの創造」とは

先生の話や誰かの発言を聴いているだけでは、一人ひとりが学びの主人公として育ちません。そのため、学びの共同体では、授業の前半は「共有の課題」として教科書レベルの内容について扱います。そして授業の後半は「ジャンプの課題」と言って、通常の授業よりもはるかに高いレベルで、3分の1くらいの子供にしかわからないような難しい内容を設定します。それによって、どの子も授業の最初から最後まで受け身ではなく、自ら学びの主人公となり、共同で探究し合う授業をつくっていくことができます。実は学力の低い子ほどジャンプの課題に夢中になるのです。お互いに協力し、支え合い、探究し合う形をつくることで、できる子とできない子が対等に学び合うことができます。

「真正の学び」とは、教科の本質に沿った学びのことです。

文学には文学らしい読みがあります。数学では問題が解けるというだけではなく、問題を解く過程が数学的思考になることを目指すべきです。理科なら、仮説を立てて検証・実験するだけではなく、そこで見えた事象を細かく観察して、説明するモデルをつくらせます。いずれの教科もそこまですることで「探究」になります。つまり、その教科の背後にある学問や文化の本質に迫るような学びをつくるのが「真正の学び」なのです。

学習指導要領のキーワードは「主体的・対話的で深い学び」です。それに先んじること20年、まさにその先駆けともいえるべき取り組みを続けてきた「学びの共同体」の理論的指導者が、東京大学名誉教授・佐藤学氏です。「行動する教育学者」として日本各地・アジア各国の小中学校を訪問し、教師と協同して学校を内側から改革する取り組みを長年にわたり行い、圧倒的な成果を上げてきた現代教育学界の第一人者です。**学びの共同体は、新時代に求められる「対話的で深い学びの創造」です。**

Q7 協同的な学びは なぜ必要か

相手意識や仲間意識を基に共に学び行動する中で、個の学習の質とともに集団の学習の質を高め、社会参画の意識も育成する。主体的に学ぶことと協働的に学ぶことをバランスよく行い、そのよさを実感すること で、探究的な学習が持続し発展するとともに、自分の考えに対する自信と確信をもつ。

Q8 ジャンプの課題とは

ジャンプの課題（高いレベルの課題）とは、課題を見たときに、それが子供にとってハードルが高いだろうと考えられる課題のことです。言い換えれば、自分の能力だと全力を出し切らなければ解決できない課題、解けそうで簡単には解けない課題、一人で調べても分からない課題、仲間と交流することによってしか解決できない課題です。

Q9 「学びの共同体」が目ざす個別最適化された学びとは

個別最適化された学びの目的は、一人ひとりの理解状況や能力・適正に合わせた個別最適化された学びを行うことで、発達障害を持つ子どもや日本語指導が必要な子ども、特異な才能を持つ子どもなど多様な子どもたちが誰一人取り残されることがないようにすることです。具体的に言うと個別最適な学びとは、一つは、一人ひとりの子どもに「自分が得意とする分野あるいは領域」を育てることです。これは、将来の進路選択やキャリア形成を基礎づける大切な 個性です。 もう一つは、一人ひとりの子どもに「自分が得意とする追求の仕方あるいはやり方」を育てることです。しかし、「個別最適な学び」は、学習を子ども個人のものとしてしまい、公教育で本来、集団で学びあうべきである学習活動を、学習を個別化して、子どもどうしを切り離して学習の変質をもたらすものになる危険があることを念頭に置くことが大切です。

Q10 主体的な学とは

「主体的な学び」とは「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる」ことだと、文部科学省は定義している。

Q11 対話的な学びとは

複数の人々がお互いに意見を出し合い、課題解決に向けた共同作業を進める学び。「深い学び」：現象や事象の本質的な理解を深め、高次の思考力を育成する学び。

Q12 深い学びとは

「深い学び」とは、単に知識を覚えて増やすだけではなく、自分自身で考え、自らの人生につなげることができる学びのことを指します。単に情報を収集することではなく、その情報を整理し、自分自身の知識と経験を基に問題解決のための考え方を身につけることが重要です。具体的には、自己の内面を見つめること、情報を正確に理解し、独自の視点で問題を考え、解決する力を養うことが求められます。

Q13 主体的、対話的で深い学びを具現化するためには

主体的、対話的で深い学びを具現化するためには探究的な学びが必須です。探究学習とは、生徒自らが課題を設定し、解決に向けて情報を収集・整理・分析したり、周囲の人と意見交換・協働したりしながら進めていく学習活動のことです。探究学習では、生徒の思考力や判断力、表現力などの育成を目的としています。